

## 幼児同士の相互作用場面における位置関係の発達的変化：活動の自由度と遊びのタイプに着目して

著者	神田 まほろ, 島 義弘
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	28
ページ	105-114
発行年	2019-03-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/00030569">http://hdl.handle.net/10232/00030569</a>

# 幼児同士の相互作用場面における位置関係の発達的变化 —活動の自由度と遊びのタイプに着目して—

神田 まほろ [鹿児島大学大学院教育学研究科]

島 義弘 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

Developmental changes in positional relations within settings of mutual interactions among children:

Focusing on types of play and degree of freedom of activities

KANDA Mahoro and SHIMA Yoshihiro

キーワード：幼児、発達、位置関係、活動の自由度、遊びのタイプ

## 目的

幼児期は、3歳後半には遊び相手が特定のになり、その関係はある程度持続的なものとなる (Hinde, Titmus, Easton, & Tamplin, 1985)。また、3歳後半から4歳までに特定の他者を十分に意識した上での友達関係が形成されると考えられている (Hartup, 1992)。幼稚園 (保育園, 認定こども園を含む) で生活する子どもたちは集団の中で本格的な仲間関係を形成していくが (Ellis, Rogoff, & Cromer, 1981), 仲間との相互作用において、どのような位置関係が好まれるのか、その身体的・空間的布置についてはほとんど検討されていない。

Piaget (1923 大伴訳 1954) による前操作期の自己中心性, Wimmer & Perner (1983) による心の理論, Selman (1980) による社会的視点取得など、幼児期の認知や対人関係のあり方には大人のそれとは異なる、幼児期固有の特徴があることが知られている。対人相互作用場面においても、幼児は大人とは異なり、対面ではなく隣を好む傾向があるなど (Cook, 1970; 外山, 1998), 幼児期の特徴の一端は明らかにされている。しかし、人の行動は個人の特性のみによってではなく、その人のおかれている状況に依存して、あるいは、特性と状況の相互作用によって生起するものであるため (若林, 1993), 多様な状況の中で相互作用の特徴を明らかにすることは、幼児期の対人関係を理解する上で重要であると考えられる。また、その対人相互作用における位置関係が発達とともにどのように変化するかを検討することによって、視覚的に捉えやすい位置関係という観点から子どもの発達状況や対人関係における課題を発見し、支援するための手がかりを得ることにもつながる。

そこで本研究では、子どもたちの行動がある程度制限されるクラスでの活動場面と子どもたちの行動に制限がかかりにくい自由遊び場面での位置関係 (分析 1), および自由遊び場面における遊びの種類による位置関係との関連 (分析 2) を検討する。

## 分析 1

クラスでの活動場面については、食事場面における席取り行動の研究がある(外山, 1998)。外山(1998)では、2歳児も4歳児も対面や斜めにあたる位置関係(以下、タテの位置関係)よりも隣り合わせまたは直角に並ぶ位置関係(以下、ヨコの位置関係)を好み、また、2歳児においてはヨコの位置関係のほうがタテの位置関係よりも相互交渉の頻度が高いなど、幼児期におけるヨコの位置関係の選好が示されている。

また、自由遊び場面に関しては、相互作用のきっかけに関する研究がある(松井, 2001)。松井(2001)によると、相互作用を開始するための方略には直接的、明示的な方略(「入れて」と言う、「○○しよう」と誘う、など)と間接的、暗黙的な方略(「ここ空いてるよ」と言う、使っているものを見せる、進行中の遊びに必要なものを持って来る、など)があり、3歳児は暗黙的な方略が4歳児よりも多く、4歳後半になると3歳児と比べて明示的な方略の使用が増加する。また、遊びの種類(区画/コーナー遊び、ルール遊び、など)によっても使用される方略やその発達差が認められている(松井, 2012)。

ここで、クラスでの活動場面については幼児の位置関係の選好は示されているが、席を決定するまでのプロセスは明らかになっていない。また、自由遊び場面では相互作用を開始するための方略が発達的に変化することは示されているが、その際の位置関係については検討されていない。位置関係によって相互作用の頻度が異なることを鑑みると(外山, 1998)、自由遊び場面でも好まれる位置関係が発達的に変化することが予測される。これらのことから、分析1ではクラスでの活動場面と自由遊び場面での子ども同士の位置関係の発達的変化を検討する。特に、ヨコの位置関係の選好がいつまで見られるのか、場所や行動の自由度が大きい自由遊び場面ではどのような位置関係が選好されるのかを検討することを目的とする。なお、クラスでの活動場面は先行研究(外山, 1998)と同じ食事場面を選択した。食事場面は席取りや場所取りが発生する可能性のある場面であり、本研究の目的に適ったものであると考えられる。

## 方法

### 観察対象

A県内の幼稚園に通う3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスに在籍する幼児を対象とした。

### 観察手続き

201x年7月中旬に4日間、観察を行った。観察時間は登園(9:00)から降園(14:30)までの間であった。観察方法として、観察する時間や対象を決めずにそのときに目に入ったことを記録するアドリブサンプリングを用いた。

幼児同士もしくは幼児と先生など相互作用が発生している場合をビデオ撮影し、分析に用いた。ビデオに記録した総時間は約7時間30分で、各クラスでの撮影時間は3歳児クラス2時間10分、4歳児クラス2時間20分、5歳児クラス2時間40分であった。

### エピソードの抽出方法

ビデオに撮影したデータの中で、中心となる子どもたちが場所を決めてから3分以上のやり取りがあった場合を1個のエピソードとした。なお、いったんその場から離れてから1分以内に戻ってきた場合は当初のエピソードが継続しているものとみなした。

**クラスでの活動場面** クラスでの活動場面では、各クラスの食事場面に観察したデータを用いた。食事場面のエピソード数は、3歳児クラス3個、4歳児クラス3個、5歳児クラス9個であった。

**自由遊び場面** 自由遊び場面のエピソードは124個得られた。このうち、映像や音声が鮮明ではないもの（距離が遠い、レンズを覆う形で相互作用が生じる、など）を除き、分析可能な84個のエピソードを抽出した。内訳は、3歳児クラス18個、4歳児クラス34個、5歳児クラス32個であった。

## 結果と考察

### クラスでの活動場面

食事場面で、幼児がどのように着席位置を決定しているかについて分析した。研究協力園では、昼食時間は自分の好きなところに座ることになっている。その際、最初に弁当を座りたいところに置いてからいすを取りに行くという決まりである。そのため、弁当を置いていすを取りに行く時点で席を決めたと判断した。以下、各年齢の事例とその特徴をまとめていく。

**3歳児** 3歳児の食事場面の着席の順を Figure 1 に、観察により抽出したエピソードを Table 1 に示した。

エピソード1のPの「となりがいい」という発言から、ヨコの位置関係にこだわっていることがわかる。FやGの目の前の席が空いていてもとなりがいいと交渉している。Nに「ここだったらお話できるでしょ」とタテの位置関係を提案されているが、Pは納得していない様子であった。また、エピソード2, 3では、1人の幼児（H, M）が席を決めた後に他児が席を決めている。後について決めるときもタテの位置関係ではなく、ヨコの位置関係で席を決めている。

これら3つのエピソード以外では、目の前の空いている席にそのまま座る場合や弁当を置いて席

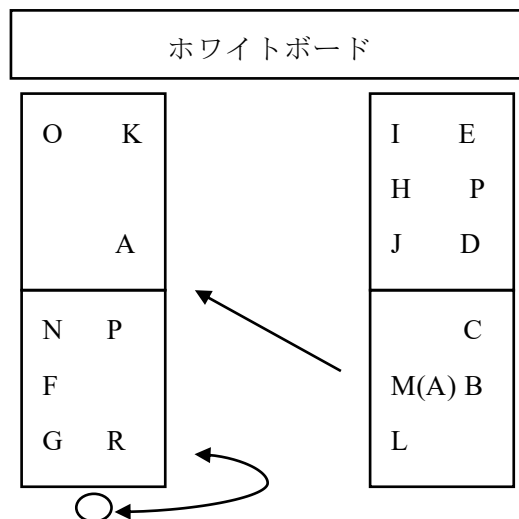


Figure 1 3歳児の食事場面の位置関係（アルファベット順に着席）

Table 1 3歳児のエピソード

人物	発話, 行動
エピソード1	
F, G	食事をどこにしようか2人で並んで歩きながら探している
F	ホワイトボード側の机の端に行ってGと目を合わせる
G	Fの様子をみて, Fの反対側にいきKのほうを見る
F	Gの横に弁当を置きいすを取りに行く
G	弁当を置いていすを取りに行く
P	「となりに座りたい」と言いながらやってくる
F	「今日は男の子と座るの」と言って許可をしない
P	「となりに座りたい」と言いながらFやGの前に弁当をおこうとする
F	Pが弁当を置くのを阻む
N	NがやってきてFの横に弁当を置く
F	「ここだったらお話できるでしょ」と言って,Nの前にPの弁当を動かす
P	しぶしぶ弁当を置く
エピソード2	
I	弁当を持って保育室をうろうろしている
J	Iの後ろをついていく
H	弁当を置く
I	Hが弁当を置くと, その横に弁当を置く
J	Iが弁当を置いた様子を見て,Hの横に弁当を置く
エピソード3	
M, L	コップの話しながら机の近くにいる
M	Lの左横に移動して, コップの話をしていると, 今度はLの右横に移動して弁当を置く
L	Mが弁当を置いたのを見てLも弁当を置く

を決めていたが, いすを別のところに持っていきそこに弁当を移動させる場合もあった。

これらのエピソードから, 3歳児は行動の自由度が小さい状況だと, PがFに対面の席を提案されても不機嫌であることからわかるように(エピソード1), タテの位置関係でも話ができることを理解はしているものの, ヨコの位置関係の選好が認められる。同様のことは, I, J, Lのように対面が空いていたとしても, ヨコの席をとることからも言える(エピソード2, 3)。

**4歳児** 4歳児の食事場面の着席位置をFigure 2に, 観察により抽出したエピソードをTable 2に示した。AとDは自由遊びの段階から常に一緒にいる関係であったため, Figure 2では楕円で囲みである。

エピソード4では, Dは他の人に場所を取られないようにAに隣をキープしておくようお願いしており, Eはその様子を見てDの横に席を決めている。エピソード5の「1人になっちゃう」というJの発言からは, タテの位置関係では別のグループになると考えていることが窺える。加えて, エピソード6のエの「おとなりじゃないと遊べないよ」という発言からも, ヨコの位置関係になれない状況でも, ヨコの位置関係が大切であると考えていることが推察される。

以上3つのエピソードから, 4歳児では普段の仲間関係とクラスでの活動場面の位置関係を関連づけており, ヨコの位置関係を重視している様子が見て取れた。また, ヨコの位置関係とタテの位

置関係は違うという認識があるということも示唆される。

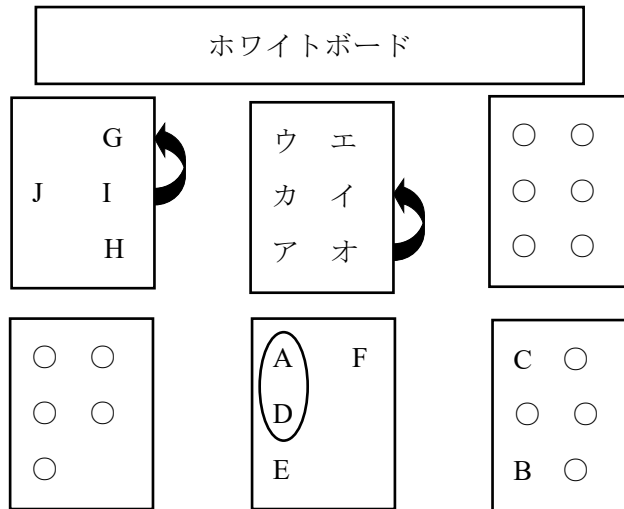


Figure 2 4歳児の着席位置（アルファベット順，五十音順に着席）

注：○はエピソードを抽出することができなかった幼児を示している。

Table 2 4歳児のエピソード

人物	発話，行動
エピソード4	
A	着席している
D	Aが着席している様子を見て，Dが急いで弁当を隣に持ってくる Aに「見ててね」と言って弁当を持っておくように伝え，いすを取りに行く
A	「うん」と言い，Dの弁当を持っている
E	Dの弁当の横に弁当を置いていすを取りに行く
エピソード5	
G, H, I	席をどこにしようか3人で並んで歩きながら探している
J	3人のところにやってくる
G	Gが弁当を置いていすを取りに行く
H	Gの横に弁当を置いていすを取りに行く
J	反対側の机に弁当を置きながらIに話かける Jの横を指差しながら「わたしのとなりいないよね」
I	「うん」と言いながらHの弁当をJの横に移動する
先生	「Iちゃん，お友達のお弁当勝手に動かしていいのかな」と後ろから話かける
I	「ううん」と首を振りながらHの弁当をもとの位置に戻す その際に，Gの弁当も動かして，GとHの間に自分の弁当を置く
J	Iに向かって「これじゃわたし1人になっちゃう。Iちゃんこっちにきて」と言う
I	にこにこしながらいすを取りに行く
J	Iの後ろをついていすを取りに行く
エピソード6	
ア	弁当を置いてすでに着席している
イ	弁当を置いていすを取りに行こうとする
ウ, エ	ウがアの横に弁当を置いて，エがイの横に弁当を置こうとする
イ	エが弁当を置くのを拒む
ウ	場所を変えて弁当を置く
エ	ウに向かって「ここだとおとなりじゃないよ おとなりじゃないと今日一緒に遊べないよ」と言う ウが動かす様子がないのを見て「今日は遊べなくなっちゃうよ。いいの？ 遊ぶって言ったよ」と言う それでも動かす様子がないウに対して「じゃあ明日遊ぶから...もういいや」と言ってウといすを取りに行く
オ	イのところに弁当を置こうとする
イ	右隣りをオにすすめる
オ	それでもイのところに弁当を置こうとする
イ	右にずれる
オ	イのところに弁当を置く

5歳児 5歳児の着席位置を Figure 3 に、5歳児のエピソードの一部を Table 3 に示した。楕円で囲ってあるものは2人組で席を探しており、席を2人で決めていたことを表している。

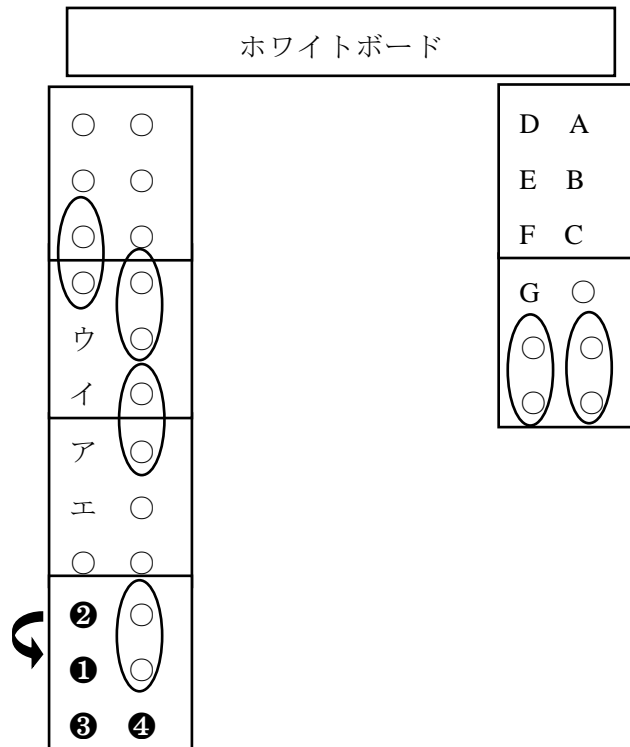


Figure 3 5歳児の着席位置 (アルファベット順, 五十音順, 数字順に着席)

注: ○は席を決めるまでのエピソードを抽出することができなかった幼児を示している。

Table 3 5歳児のエピソード

人物	発話, 行動
エピソード7	
A, C	弁当を取ってくる前に「一緒に食べようね」と事前に話をしている
D	「Aくんの横で食べるね」と言う
A	弁当を置いていすを取りに行く
B	Aが置いた弁当の横に弁当を置いていすを取りに行く
C	Aの横に他の弁当があるのを見て, その横に弁当を置く
D	Aの横に他の弁当があるのを見て, Aの正面に弁当を置く
エピソード8	
イ, ウ	弁当を持って, 机の近くにいる
ア, エ	弁当を持ってくる
イ, ウ	アの横をだれが取るかで無言で弁当の場所取りがはじまる
エ	アの手を引いて自分の横に弁当を置かせようとする
イ, ウ	エがアの手を引く様子を見て一緒に弁当を動かす
ア	弁当を置いていすを取りに行く
イ, ウ	アが置いたのを見て, それぞれが弁当を置く
エ	ウの横を指して, アに示すがアが見ていなかったため, アの横に弁当を置いていすを取りに行く
エピソード9	
①	弁当を置いていすを取りに行く
②	①が弁当を置いた様子を見て, その横に弁当をおき, ①がいすを取りに行くのを見て自分の位置と場所を変える
①	いすを持ってきたが, 弁当の場所が変わっていることに気付かず自分の弁当の前に座る
③	②の左横に座りたい様子を見せたが, ②に「ここがあるよ」と①の右横を提案され, ①の右横に弁当を置く
④	どこで食べようかうろろうしている
⑤	④に「どこで座るの」と声をかける
④	ホワイトボード側を指さして「あっちで食べる」と答え, ホワイトボードの方を向くが, そのまま③の前に弁当を置く

の横や対面に席を決めていた。関連して、エピソード9では①～③でヨコの位置関係になれない場合にタテの位置関係に席を決める④の様子が観察された。エピソード8ではアが席を先に決めることで周りもその横に続くように席を決めていた。

これらのエピソードから、5歳児もヨコの位置関係を好むが、周りの状況を見てタテでの位置関係を選択する様子も見られた。また、普段の仲間関係の延長で、仲のいい友達同士で近くに席を決めていることがわかる。ヨコの位置関係の選好も認められるが、タテも含めた「グループ」という意識の芽生えが窺える。

### 自由遊び場面

自由遊び場面に生じたエピソードをTable 4にまとめた。エピソードはタテの位置関係、ヨコの位置関係、3人以上の円になっている関係（以下、円の位置関係）に分類した。

全体的にはヨコの位置関係となる場面が多いが、タテ、円の位置関係もヨコの位置関係の半分ほど見られた。3歳児では大半がヨコの位置関係であり、カメラを作って対面で撮るふりをしながら遊んでいたときにのみ、タテの位置関係が見られた。4歳児ではタテの位置関係も見られるようになり、製作遊びでは互いに違うものを作るときはヨコ、同じものを作るときはタテの位置関係が多いという、状況に応じた位置関係の選択も認められた。5歳児ではヨコの位置関係が多いものの、3、4歳児ではあまり見られなかった円の位置関係での遊びも認められた。5歳児では1対1ではない、多人数での遊びが増えたことも関連していると考えられる。

### 分析1の全体考察

幼児期には、クラスでの活動場面と自由遊び場面どちらにおいてもヨコの位置関係が好まれる傾向があることが示された。

3歳児では仲間関係自体は明確ではなく、普段の関係が直接的に席取り行動に反映される様子は観察されなかったが、自ら進んでタテの位置に席を決めたり、タテの関係で遊んだりする様子もあまり見られなかったため、「誰かと一緒に」という状況では3歳児の位置関係はヨコが主となると考えられる。4歳児では、クラスでの活動場面ではヨコの位置関係が重視される一方で、自由遊び場

Table 4 各クラスの自由遊び場面

クラス	位置関係	遊種類の数	遊種類の種類
3歳児	タテ	2	ごっこ遊び（撮影ごっこ）
	ヨコ	16	製作遊び，ごっこ遊び（ままごと），絵本
	円	0	
4歳児	タテ	13	製作遊び，ブロック遊び，水遊び
	ヨコ	18	お絵かき，製作遊び，ごっこ遊び（ケーキ屋さん）
	円	3	ごっこ遊び（ままごと），虫探し
5歳児	タテ	6	ごっこ遊び（お祭りごっこ），製作遊び，水遊び
	ヨコ	18	ごっこ遊び（お祭りごっこ），製作遊び
	円	8	ごっこ遊び（お祭りごっこ），製作遊び

面ではタテの位置関係も生起しており、場面に応じて柔軟に位置関係を調整することができるよう



になるものの、自由度が小さい場合にはヨコを選好する傾向が認められた。また、エピソード6のウの発言に象徴されるように、「となり」に対して仲良しのしるしや遊ぶための約束のような意味も付与されているようである。5歳児になると、クラスでの活動場面においてもタテの位置関係が生起しており、自由遊び場面では3人以上になると円の位置関係を好む傾向も認められた。5歳児は相互作用場面の特質に応じて、状況に即した位置関係を選択できるようである。幼児期の間に進む他者理解（心の理論、視点取得など）の発達によって、自己とは異なる他者の視点を理解できるようになることが、このような位置関係の発達的変化の背景に存在するものと考えられる。

## 分析2

分析1では、クラスでの活動場面と自由遊び場面のいずれにおいてもヨコの位置関係が好まれること、年齢が上がるにつれてタテの位置関係や円の位置関係が生じてくることが示された。しかし、自由遊び場面では様々な遊びがあり、遊びの種類が統一されているわけではない。そこで、分析2では、分析1の自由遊び場面のデータを用いて、遊びのタイプと位置関係の関連を検討する。なお、遊びのタイプはParten (1932) による6つの分類を用いる。

### 遊びのタイプの分類

各エピソードを並行遊び、連合遊び、協同遊びの3つに分類した。相互作用場面の観察のため、専念しない遊び、傍観者遊び、ひとり遊びはエピソードとして記録されなかった。

## 結果と考察

年齢と位置関係のエピソード数の関連をTable 5に示した。 $\chi^2$ 検定の結果、年齢と位置関係は独立ではなく ( $\chi^2(4) = 13.29, p < .01$ )、3歳児ではヨコの位置関係、4歳児ではタテの位置関係、5歳児では円の位置関係が多かった。また、位置関係と遊びのタイプ別のエピソード数の関連をTable 6に示した。 $\chi^2$ 検定の結果、位置関係と遊びのタイプは独立ではなく ( $\chi^2(4) = 22.27, p < .01$ )、並行遊びではヨコの位置関係が多くタテの位置関係は少ないこと、連合遊びではタテの位置関係が多く、協同遊びでは円の位置関係が多いことが示された。

以上のことから、年齢が上がるにつれてヨコからタテ、タテから円へと位置関係が変化していることが読み取れる。また、並行遊びではヨコ、連合遊びではタテ、協同遊びでは円の位置関係が多く認められることも併せて示された。幼児期の遊びは年齢とともに並行遊びから連合遊び、協同遊びへと変化していくが (Parten, 1932)、この変化に同期して幼児同士の位置関係も変化している。

Table 5 年齢と位置関係の関連				Table 6 位置関係と遊びのタイプの関連			
	3歳児	4歳児	5歳児		並行	連合	協同
ヨコ	16	18	18	ヨコ	19	25	8
タテ	2	13	6	タテ	2	17	2
円	0	3	8	円	1	3	7

遊びのタイプの特徴に伴って、幼児が好む、もしくは、取りやすい位置関係も変わっていくものと

考えられる。加えて、5歳児では円の位置関係が多く生起しているが、円の位置関係は協同遊びで多く認められるものでもある。幼児期の終わりには対人関係が広がり、1対1ではなく、より多人数の集団で1つの遊びを構成するようになることも、位置関係の変化の一因であると考えられる。

### 総合考察

本研究では、幼児がおかれている状況によって好む位置関係が変わってくると仮定して、幼稚園の活動から席取りや場所取りが発生する可能性のあるクラスでの活動場面（食事場面）と自由遊びの場面とにおいて相互作用が発生する際の幼児同士の位置関係について検討した。

まず、クラスでの活動場面では、3歳児から5歳児のいずれにおいてもヨコの位置関係を重視する傾向が認められた。ヨコの位置関係は、普段からの仲の良さや次に遊ぶための約束のようなものであったり、友達との仲の良さであったりを示しているエピソードが4歳児で抽出されており、3歳児でもタテの位置関係ではなくヨコの位置関係にこだわるエピソードが観察された。一方、5歳児に関しては、ヨコの位置関係を好んでいると考えられるエピソードが多く抽出されていることは3、4歳児と変わらないが、横が空いていない場合はタテの位置関係になるなど、そのときの状況に応じて席を決めていた。他者理解の発達途上にある3、4歳児においてはヨコの位置関係であることが相互作用の可能性を高めるのに対して（外山，1998），他者理解が進む5歳児においてはヨコの位置関係が選好されるものの、タテの位置関係でも相互作用が可能になるためであると考えられる。ただし、本研究では一貫して、行動の自由が制限される着席場面では、幼児はヨコの位置関係を選好する傾向が認められた。

自由遊び場面においても、ヨコの位置関係が多く見られたが、年齢とともにタテ・円の位置関係での関わりが増加していた。また、こうした変化は遊びのタイプと関連していた。多人数で遊びや活動を構成できるようになり、集団という意識も芽生えてくるにつれて、幼児同士の位置関係にも変化が生じるようである。遊びのタイプによって位置関係が調整されるのか、他者理解の進展によって多様な位置関係を構築できるようになることがより高次の遊びを可能にするのかは本研究からは詳らかにならないが、位置関係の変化が社会性の発達の指標の1つになり得る可能性が示唆された。

最後に、本研究の限界と今後の課題を2点述べる。第1に、本研究では相互作用場面における幼児の行動に着目したが、人の行動は個人特性や状況のみで決定されるものではなく、個人特性と状況の相互作用によって生起するものであるため（若林，1993），観察対象となる幼児の個人特性を踏まえた検討が必要である。第2に、成人の着席行動に関しては、タテの位置関係はフォーマル、ヨコの位置関係はインフォーマルな関係（あるいは場面、状況）を意味すること（Russell, Firestone, & Baron, 1980），会話場面では直角および対面の位置関係を好み、隣合わせを好まない傾向があること（Cook, 1970）が報告されている。本研究では食事場面や自由遊び場面において、幼児がヨコの位置関係を選好するものの、次第にタテや円の位置関係も生じてくることを示したが、フォーマル・インフォーマルといった場面の質の違いによる位置関係の選好、あるいはフォーマル場面における

タテの位置関係を選好するに至る過程は検討していない。より多様な場面、幅広い発達段階を対象とした研究により、相互作用場面における位置関係の発達の变化を体系的、包括的に検討する必要がある。

#### 引用文献

- Cook, M. (1970). Experiments on orientation and proxemics. *Human Relation*, 23, 61-76.
- Ellis, S., Rogoff, B., & Cromer, C. C. (1981). Age segregation in children's social interactions. *Developmental Psychology*, 17, 399-407.
- Hartup, W. W. (1992). Peer relations in early and middle childhood. In V. B. V. Hasselt, & M. Hersen (Eds.), *Handbook of social development* (pp.257-281). New York: Plenum Press.
- Hinde, R. A., Titmus, G., Easton, D., & Tamplin, A. (1985). Incidence of "friendship" and behavior toward strong associates versus nonassociates in preschools. *Child Development*, 56, 234-245.
- 松井 愛奈 (2001). 幼児の仲間との相互作用のきっかけ: 幼稚園における自由遊び場面の検討 発達心理学研究, 12, 195-205.
- 松井 愛奈 (2012). 子どもの遊びと仲間との相互作用のきっかけ 清水 由紀・林 創(編著) 他者と関わる心の発達心理学—子どもの社会性はどのように育つか— (pp. 113-128) 金子書房
- 外山 紀子 (1998). 保育園の食事場面における幼児の席とり行動: ヨコに座ると何かいいことあるの? 発達心理学研究, 9, 209-220.
- Parten, M. B. (1932). Social participation among pre-school children. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269.
- Piaget, J. (1923). *Le langage et la pensée chez l'enfant*. Delachaux et Niestlé.
- (ピアジェ, J. 大伴 茂 (訳) (1954). ピアジェ臨床児童心理学 I—児童の自己中心性— 同文書院)
- Russell, J. C., Firestone, I. J., & Baron, R. M. (1980). Seating arrangement and social influence: Moderated by reinforcement meaning and internal-external control. *Social Psychology Quarterly*, 43, 103-109.
- Selman, R. L. (1980). *The growth of interpersonal understanding: Developmental and clinical analyses*. New York: Academic Press.
- 若林 明雄 (1993). パーソナリティ研究における“人間-状況論争”の動向 心理学研究, 63, 296-312.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983) Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.